

教科と特別活動の連携による教育効果の探究

ーダンス授業のカリキュラム開発と実践ー

井上 恵吏 (滋賀大学)

1. 目的

本研究は、中学校の保健体育科におけるダンス授業と特別活動（体育大会）を連携させ、特別活動で育成する人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を取り入れた系統的なカリキュラムを開発・実践し、その教育的効果を検証することを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：中学校第1～3学年の生徒（計232名）
- 2) 調査方法：仲間づくりの形成的評価票（小松崎ほか、2001）、体育大会後のアンケート調査、体育の形成的授業評価調査（高橋ほか、1994）、運動有能感測定尺度（岡沢ほか、1996）を実施した。
- 3) 分析方法：各学年の授業成果と課題を比較し、体育大会への接続の効果を検討した。

3. 結果と考察

- 1) ダンス授業と体育大会の連携に向けた授業実践
ダンス授業を通じて生徒は「踊る楽しさ」や「自己表現」の意識を高め、体育大会での演技にも活かされた。創作ダンスの導入により話し合いや協力が促進され、集団的な達成感が生まれた。男女共習のクラスでは異性との協力が進んだが、初期段階では距離感や役割調整に戸惑う場面があった。男女別習のクラスでは男子の積極性にばらつきがあり「社会参画」の視点が弱かった。また、ソーラン節のオリジナル振り付けではリーダーシップが発揮されたが、一部の生徒は受動的であり、役割の明確化や主体的な関与を促す指導が求められた。
- 2) 体育大会との連携
体育大会では、多くの生徒がダンス授業の学びを活かし、特別活動の3つの視点で成果と課題が見られた。人間関係形成では協力やコミュニケーションが向上したが、社会参画では活動の目的が曖昧で達成感を得にくい生徒もいた。自己実現ではリズム感や協力スキルの向上が確認されたが、学習の定着不足や主体的な参加の欠如が課題とな

った。ソーラン節では協調性が重視され、創造性の発揮が難しい傾向があった。これらを踏まえ、スキルの共有や授業設計の改善が求められる。

3) 教科と特別活動の連携に向けたダンス授業開発

第1学年のダンス授業では、現代的なリズムのダンスを題材に表現力や創造性、協働性を体育大会の演技に活かす学びを創出した。アンケートでは有能さの認知・統制感・受容感の有意な向上が確認され、リズムや振り付けの成功体験が生徒の自信につながった。一方、創作活動の停滞や一部の生徒の主体性の欠如が課題となり、支援の工夫が求められた。

4. 結論

本研究を通じて、体育授業と特別活動を連携させた体系的なカリキュラムの重要性が明らかになった。ダンス授業を活用し、生徒が特別活動の3つの視点を実感できる工夫は、教育効果の向上に寄与した。一方で、創作活動の進行や生徒の主体的な関与には課題が残り、改善が求められる。今後は、各学年のカリキュラムを精査し、体育授業と特別活動の相互作用をより強化するとともに、教科間や学校全体での連携を推進する。これにより、学びの成果を社会参画や自己実現へとつなげ、生徒の主体的な学びを支える教育活動を目指す。

5. 主な参考文献

- 1) 小松崎敏, 米村耕平, 三宅健司, 長谷川悦示, 高橋健夫(2001) 体育授業における児童の集団的・協力的活動を評価する形成的評価票の作成. スポーツ教育学研究, 21:57-68.
- 2) 高橋健夫, 長谷川悦示, 刈谷三郎(2015) 体育授業の「形成的評価法」作成の試み: 子どもの授業評価の構造に着目して. 体育学研究, 39:29-37.
- 3) 岡澤祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎(1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16:145-155.